



2010・12

SORA 34号

寒紅

柴田 佐知子

鼻筋の並ぶ馬小屋寒波来る

船が出る島の蜜柑を詰め込んで

寒紅をぬぐひて夜の顔となる

北風や刺客はいつも横顔で

初鶏の身を細くして鳴き収む

満月や刺し違ふるは抱くごと

玄海の方へ枕を据ゑて冬

鯛焼の鱗大きく焼き上がる

山間に田畑あつまり神楽笛

大蛇出て闇のとどろく里神楽

―「俳句研究」冬号より―

火の山にひれ伏すやうに若菜摘む

大寒の鐘が撞木を突き返す

神下ろす太鼓を一打初嵐

蟪蛄に拝塵の貌無かりけり

大まかに着付けられたる菊人形

湖を埋め尽くすまで黄落す

水鳥も鯉も怠けて美術館

青木繁

自画像の片眼は闇ぞ秋しぐれ

泣かれてはどうにもならず夜の雪

底冷の芯に奥の間ありにけり

遊び女のぞろりと立てる屏風かな

父にまた葉が増えて冬ぬくし

—「俳句α」12・1月号より—

秋の風

苑

実

耶

冬晴

秋

千

晴

石段に人のあふるるくちかな

花瓶より大きな菊の控室

空高し祓ひて樟の大樹伐る

黄落や裏も表も見せながら

田の神も産土神も共に秋

名月と同じ高さの観覧車

刈り終へて大河あらはになりけり

冬晴れや郷土力士の旗なびく

牛の競り始まる日なた秋の風

千歳飴巫女はかがんで渡しをり

団栗の芽や耕作を放棄せり

年越や眉太き僧紅潮す

鴨の陣可愛気のなき声交はす

達筆の賀状読めずに回し見る

揺れながら乳房に柚子の近づけり

ふる里は博多雑煮と母の声

鹿 笛 堀江 恵子 一枚岩 松田 明子

老猫のそば木犀の雨を聴く

一日を上手に使ひ水を打つ

草の上につまみて移す秋の蝶

あつさりと二百二十日も過ぎにけり

鹿せんべいありますつるべ落しかな

ちちははの在はす日のごと月祀る

月明の暈を猫のわたりくる

出雲への神話街道星月夜

細長く欠伸する子や運動会

露踏みて一の鳥居をくぐりけり

ジェット機の引く白線や運動会

阿蘇谷の芒の道は風の道

袱紗打ちふくいくと蛇穴に入る

底紅や路地の奥までなまこ壁

鹿笛の坂ゆるゆると二月堂

秋水のくぐる一枚岩の橋

菊人形

樋口みのぶ

釣瓶落し

吉村 摂護

破顔一笑ひまはりの咲きにけり

長崎忌調子外れの法師蝉

母いつも笑みをたやさず苔の花

白桃を剥いて優しき掌となりぬ

縁先に据うる大石小鳥来る

五島灘霧襖突く護衛艦

師の句集声にしてゐる月の客

海が引く釣瓶落しの陽の太き

裾すでに翳りの見えし菊人形

月光の照らす三千黒酢甕

機嫌よき鋏の音や松手入

破れ蓮や上に聳ゆる裁判所

悪童も泣き虫の子も夕焼けて

蚤の市足の踏み場も無き小春

コスモスの詰まつてゐたる休耕田

小六月元寇防塁ひそと立ち

ひぐらし 矢野百合子

十三夜

高倉恵美子

豆汽車の巡る花野は額ほど

何事も無くて過ぎたる厄日かな

蝉しぐれあつさり母の丈越して

休耕田の真中に咲きし彼岸花

わが齢声にしてみる敬老日

手にのせてくれる無花果断れず

内海に潮すぢ伸びる新松子

すぐ乾く自髪が少し十三夜

天高し鍬音ひびく斜畑

高枝を揺らして百舌鳥の鳴きにけり

ひぐらしやそろそろ腰を上げようか

太り過ぎたる芋虫の動かざる

秋深む水琴窟の水音も

秋暑し道にはみ出す大南瓜

柏手にまつすぐ银杏散りにけり

難しきパズルを解きて夜長し

空作品抄
—
柴田佐知子抽出

境内の裏の逢瀬や冬椿

人形の襦袢は松葉や菊を挿す

負^{おひ}ひ紐の擦れし胸の辺水の秋

敗荷のもしわれならば揺れやまず

夕映は神の手遊び鱗雲

福岡

高倉和子

東京

中田みなみ

長崎

荒井千佐代

埼玉

服部早苗

糸田

宮井知英



放生会わが背はどこへ行つたやら

須惠

苑 実 耶

毒を持つ菌に生まれ華やげる

千葉

原 友 子

秋まつりお手を拝借にて終り

福岡

柴田志津子

包丁を研ぐ銀漢にくぐらせて

大阪

堀江恵子

夕立の柱立ちたる海の上

福岡

大地真理

白足袋の糸一本で干されたる

糸島

小林朱夏

原つばは黄泉にもあるや秋桜

北九州

片田きく

地芝居の明治の幕の開きにけり

福岡

中条さゆり

龍の首空突き破るくんちかな

福岡

あさなが捷

一病を労はりあひて日向ほこ

行橋

安武農子

鹿せんべいありますつるべ落しかな

大阪

堀江恵子

ちちははの在はす日のごと月祀る

熊本

松田明子

縁先に据うる大石小鳥来る

福岡

樋口みのぶ

空作品評

柴田佐知子

人形の襦袢は桧葉や菊を挿す

中田みなみ

菊人形の製作風景。基礎の木組みを隠すようにま
ずは空間を桧葉の緑で覆いその後、纏うように大小
の菊が挿されてゆくのである。「襦袢は桧葉や」
は正確な描写といえる。見落とさない眼の力と表現
力に裏打ちされた端的な確かさがある。

境内の裏の逢瀬や冬椿

高倉 和子

秘めごとの一つや二つ菊の芯

田代 貞枝

一句目、「冬椿」の素朴さがいい。土のにおいが
するレトロな雰囲気逢瀬である。この句が句会に
出された時、大いに賑わった。連衆の質問を浴びた
作者の話によると、生家の庭続きに村の鎮守があり、
木々が茂る境内裏は逢引のメッカで、幼い作者は大
人たちから日が暮れたら神社に近付いてはいけない

と言われていたそう。その思い出を詠んだとの説
明を聞いた連衆の間に、残念といった空気が漂った
のは致し方ない。このような句の場合、作者は語ら
ずに読者の想像に任せたいほうがよさそう。それは
二句目の貞枝さんの歯切れのいい句にも言える。聞
かれてもにっこり笑っていた方が愉快だ。

包丁を研ぐ銀漢にくぐらせて

堀江 恵子

包丁を研ぐという日常の些事が斯くも美しい詩に
昇華されたことに驚く。ダイナミック且つ繊細。言
葉のひとつひとつが、まさに銀漢のような輝きを
放っている。恵子さんの内部に流れる詩情が結晶し
た透明感のある作品である。

夕映は神の手遊び鱗雲

宮井 知英

鱗雲が夕日に染まりこまやかな濃淡を描く景に感
動した作者の鼓動が伝わってくる。「神の手遊び」
という鮮やかな措辞によって、自然が描く美が格別
なスケールをもってひろがってくる。それを見上げ
る人間のなんと小さなことか。(以下略)

空集

柴田佐知子選

大楠の伐り倒されし厄日かな
粕屋 秋 千晴

柿吊す柿の木よりも高々と

井戸ポンプ楽しんでゐる秋彼岸

乳母車はみ出すやうに着ぶくれて

こんにやくは角失なはずおでん鍋

仕舞湯の柚子の重たくなつてをり

園丁の作業に馴れて鴨歩む

冬立つや畦縦横に交はりて
粕屋 長 憲一

名月が厨の窓にとどまりぬ

晩秋の川の中まで山来る

新殿に仏像うつす今朝の秋

八月や夜も白雲は嶺を越え

雀また止まる案山子の怒り肩

水薄く堰を超えゆく盆の入り

菊の香の宝物殿にとどかざる
糸島 小林朱夏

海人の露地猫の露地あり新松子

夕映は神の手遊び鱗雲

秋の蝶息ととのへて翔ちにけり

山畑は山に還りぬ蔓珠沙華

青みかん手向けの神へ一つ置く

曼珠沙華飛行機雲は袈裟懸けに

蓑虫や女も家を捨てまする

鮎桶の箍緩みたる冬隣



糸田 宮井知英